

◎新型コロナウイルス禍で考える日本の行方

◎第4回 感染拡大で様変わりする日本の正月

◎全国日本語学校連合会 研究員 對馬好一

明けましておめでとうございます。

新型コロナウイルス感染症拡大の中、新しい年、令和3(2021)年を迎えましたが、いかがお過ごしでしょうか。緊急事態宣言が再発令されるほど、コロナ禍は引き続き猛威を振っています。皆様もウイルス感染拡大以前とは様変わりの生活を余儀なくされていることと拝察いたします。

今年の日本の正月は従来とは全く違う風景になりました。東京では、明治神宮のおおみそか夜から元旦にかけての初詣の受け入れを恒例の夜通しではなく、午前6時開門にしたほか、鉄道の終夜運転などが見送られたことをご承知の通りです。全国の神社の参道に並ぶ様々な屋台も、今年は数が大幅に減りました。

神社の境内に入るところには、検温器や手指消毒、場所によってはアルコール消毒剤が入ったミスト噴射などの設備が置かれ、マスクの着用を義務付けているところが多く見られました。また、本殿に向かう前に手や口を水で清める手水舎の柄杓がないところが多くなっています。

冒頭からコラムの本旨とは脱線しますが、せっかくの機会ですので、ちょっと長くなるものの、留学生の方に日本文化の一部を知っていただくのと感染防止のため、一般的な神社の参拝の仕方をご紹介します。

神社の入り口や参道の途中には鳥居が設置されています。見上げるような大鳥居もあれ

ば、人1人が通れる小さいものもあるでしょう。ここでは、左右の柱の間の中央で立ち止まり、脱帽の上、本殿に向かって一礼してから通り抜けます。鳥居の端や脇ではなく、中央で礼をするのは神社に対する敬意の表れです。

手水舎で身を清める際は、右手で持った柄杓で水を汲み、まず、左手の指、手のひらに水をかけます。次に柄杓を左手に持ち替え、右手に同じように水をかけます。さらに右手に持ち替え、丸めた左手に水を受け、その水で口を漱ぎます。口に含んだ水は飲みこまず、左手に戻し、そのまま下に流します。柄杓で左手に水をかけて洗い流します。ここまですべてを最初に汲んだ柄杓1杯の水で行います。もし、水が柄杓の中に残ったら、柄杓の中が自分に見える方向で柄を下にして立てて中の水を流します。一連の所作で柄杓には口をつけず、使った水すべては手水舎の水槽には戻さず、地面や下水に流します。これで本殿に向かうために身を清めたことになります。今はコロナ禍でマスクをしているので、私は、マスクをしたままで、口に水を含まず、形だけで行っています。さらに脱線すれば、10日から初場所を迎えた大相撲の取組前に力士につける力水も、新型コロナ感染症が広がってからは、実際には水を汲まず、力士も柄杓に口をつけません。

神社の話に戻しましょう。本殿に向かって参拝する際は、脱帽の上、多くの神社が二礼二拍手一礼ですが、出雲大社系の神社は二礼四拍手一礼です。各神社とも拍手の際は音を出しますが、葬儀など弔事の場合は、音を出さないように手を合わせるしきたりです。賽銭を上げる場合は、この礼法の前に、賽銭箱に投げ入れます。鈴がある神社では礼の前後に鈴を鳴らします。

本殿の前を横切る際や、鳥居をくぐって退出する際は、それぞれ本殿に向かって礼をします。

以上が、神社の代表的な参拝作法ですが、地域や状況によって多少変わることはあるでしょう。コロナ禍の中では、感染予防のため、手水舎の柄杓を置かず、手水の作法を省略したり、水道の蛇口の流水を使うなどの工夫や、本殿前の鈴の使用を中止している神社がほとんどです。

我が国発展の礎^{いしづえ}となった英霊^{えいれい}を祀り、毎年、正月には全国から戦没者遺族^{せんぼつしゆ}ら参拝者が集まる東京・九段の靖国神社でも、今年は賑やかな屋台はなく、茶店など境内各所には「禁酒」の張り紙が貼られ、新年を祝うお神酒（みき）のふるまいもありません。マスクをして間隔をおいて本殿に向かう参拝者が、例年にはない静謐^{せいひつ}の中で、厳かに、戦陣に散った亡き先祖の御霊（みたま）への祈りを捧げていました。本殿わきの能楽堂などで行われる新年を祝う唱歌や芸能の奉納も、いつもより奉納団体が少なく、参観者も昨年の三分の一ほどしか集まっています。

一方、日本の学生スポーツの中で最古と言われる慶應義塾大学の柔道部で毎年極寒の1月寒中に行われてきた寒稽古^{かんげいこ}が、今年には行わないことが決まりました。この稽古は、6歳の小学1年生から80歳代の大先輩まで100人以上が東京・港区三田の柔道場に集まり、早朝5時半から7時まで、もうもうと湯気を立てて、熱気でガラス窓が曇るほど体を動かし、柔道の乱取りなどを行うものです。

同柔道部は、明治10（1877）年、慶應義塾の創始者で1万円札の肖像画にもなっている福澤諭吉^{ふくざわゆきち}が、同塾の小学校に当たる幼稚舎の初代舎長で柔術高段者ある和田義郎^{わだよしろう}に指示して、子供たちに柔術を教えたのが始まりで、これこそが「日本の学生スポーツの起源」と言われています。その翌年から始まった寒稽古は、二十四節季の「大寒」に当たる毎年1月初旬から中旬に行われてきました。戦争中も毎年受け継がれたほか、終戦後、連合国軍最高司

令官総司令部（GHQ）の指示で、「日本の軍国主義の再興につながる」として武道が禁止されていた時期にも、都内の寺院の境内にあった小さな柔道場に慶應の OB、学生が集まり、秘かに続けていました。最近は、大学、高校の学事日程の都合で、1月上旬の6日間程度の開催になっていますが、半世紀前には2週間、それより前には1カ月続いていたこともあります。柔道少年たちにとっては、毎朝真っ暗で寒い中、道場に通り、最終日に皆勤賞の賞状をもらって、温かいお汁粉を頬張るのが、何よりの楽しみになっていました。

建て替えて三田の道場が使えない時には、横浜市の日吉キャンパスの中にある道場で行ったこともありました。これだけの規模で143年続いた寒稽古は世界中でもおそらくここだけでしょう。しかし、今年はコロナ禍のため、実施することができません。連続150年開催を目前に控え、関係者にとっては断腸の思いです。

go to キャンペーンの一時中止に加え、1月7日には、東京都、埼玉県、千葉県、神奈川県で2度目の緊急事態宣言が出され、飲食店の営業時間が午後8時までに制限されました。期間は約1カ月ですが、その後、どのような社会状況になるのか、見通しは全く立ちません。そして、この影響は旅行業者や飲食店ばかりではありません。

例えば、佐賀市のある写真館では、コロナ前には結婚式や披露宴、前撮りなどをセットで撮影していましたが、披露宴はなくなり、街中や公園での写真撮影もままならないとか。子供の成長を祝う伝統行事である11月15日の七五三の前後は、神社でのお詣り、写真撮影が集中しますが、昨年はその集中を避けて8月から晴れ着で記念撮影をする親子が多く、その依頼が年末年始まで繋がっているといます。

成人式も、今年は11日が成人の日ですが、行政主催の式典を中止したりオンラインにしたり延期したりする自治体が多いようです。それを逆手にとって、佐賀県嬉野市の茶農家で

は、茶畑の中に舞台のような台をつくり、茶葉をバックに成人式や結婚式の儀式を行う新しい企画を模索しているという話も聞きました。

このように、新型コロナウイルスのおかげで、私たちはこれまでとは全く違う日常の中で新しい年を迎えました。その中で「学校に行けないので友達ができない」「会社の収入が激減したので雇止めに遭った」などの悲しい話は数多あります。でも、その一方で、世界の大学・学校では、オンラインを活用した新しい教育研究のプラットフォーム開発に力を入れているといます。慶應義塾の長谷山彰塾長は、義塾社中（学生・生徒、教職員、卒業生、保護者を含む関係者の総称）一同に配布する機関誌『塾』の2021年冬号で、各校が授業支援システムなどのインフラ整備に力を入れていることを強調するとともに、「感染症の影響で人々は孤立を余儀なくされ、閉塞感からくる差別や中傷、暴力が発生しましたが、他方で、ネット上に沢山の癒しや希望を与える動画が配信されるなど、インターネットによって世界は絆を保ちました」と述べています。

私たちは、先人が築いた伝統を継承するとともに、時代にあった変革を取り入れていかななくてはなりません。1月9日付の『産経新聞』では、第3波の感染拡大に伴い、「医療現場迫られる命の選別 高齢患者の人工呼吸器、難しい判断」との記事が載っています。ここでは紙幅がないので、詳しい状況は次回以降に譲りますが、欧米に比べて感染者が少なかった日本においても、ウィズ・コロナ、ポスト・コロナの生活を見据え、新しい日常生活を築いて行く必要があるでしょう。医療面でも、生活面でも新しい社会建設のためのスタートを切る年にしなければなりません。

本年の皆様のご健勝とご活躍を心から祈念致します。